

弥生中期大形集落・瓜生堂遺跡の一構成単位

秋山浩三

1. 瓜生堂遺跡北東部における様相

(1) 弥生中期における地形環境

今回の当センターによる一連の調査区は、瓜生堂遺跡では北東端部域に相当する。この付近では、これら以外に大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、(財)東大阪市文化財協会による発掘と試掘調査が実施されており、その対象地はおおむね東西約750m、南北約23mにおよぶ(図400)。このうち市45次区および今回の99-2区では、それまでの試掘結果に規定され弥生中期相当層まで発掘が達した範囲は限定されたが、それ以外では、当該期の様相に関しほぼ把握することができる。本節では、これら一連の成果に基づき、遺跡北東部における遺跡最盛期・弥生中期後半を中心とする時期の様相を概観し、今回の調査内容の位置づけをおこなっておきたい。

まず、付近における当時の地形環境を確認しておこう(本書図4~9、表2参照)。一連の調査区のすぐ北側(現在の近鉄ハーツ部の大半)における試掘では、弥生中期相当層にまったく遺構・遺物が確認されず当時は河内湖域にあたる事が判明している。よって、今回の調査区付近は、河内湖に面した南岸域“ウォーターフロント”に相当する。

この東西約750mの範囲における地形の大略の様相としては、①99-10区中央部と市46次区から西側の微高地、②99-6区東端部と市47次(C)区最東端部から東側の微高地、③それら両微高地間の微低地、に3区分できる。この地勢に応じて、弥生中期後半では基本的に、①は集落域、②は墓域として利用され、③微低地は原則的には不利用地として把握できる。一方、詳細な状況をみると、③では、99-7区~9区で部分的に溝や堤状遺構が確認できたので、まったく人為的痕跡がないではない。しかし、遺物量や遺構内容が①②に比べて極端に異なり少ない。②墓域に関しては、01-1区では明確な墓域としての様相が把握できないので、現状で墓域東端が最も東にのびた場合は99-1区となる。また、墓域西端とした99-6区では、弥生後期以降の流路等による浸食や人為改変を受けているので、元来は墓域が現状より西へ若干はのびていた可能性は否定できない。そして、その墓域の東西間内における01-2区や99-4区はやや低位部にあたりしかも墓域としての利用は否定的であるので、後述するように、墓域内部が微細地形に規定を受けさらに区分されていたと考えられる。

このように当該地の弥生中期後半の様相は、地形に相応した①集落域、②墓域、③低地域の三様の展開をみせるが、本遺跡の他地点に比べた際のここでの大きな特徴として、各域での利用状況が存続期間内において場所的に固定されていた点をあげることができる。他地点では、中期集落に重複して墓域が形成されていることが多い事実と対照的な様相を示している。

また、上記①~③の利用時期については、出土土器での把握によるかぎり、原則としていずれも中期後半である。ただ、細別土器様式で表現するならば、①集落域ではⅣ-1・2様式(寺沢・森井1989、以下同じ)前後におおむね限定できるが、②墓域ではその時期を主体としながらもⅢ様式にさかのぼる土器の出土をみる。このように確認できた情報からでは、墓域の形成の方が集落域よりやや先行するよ

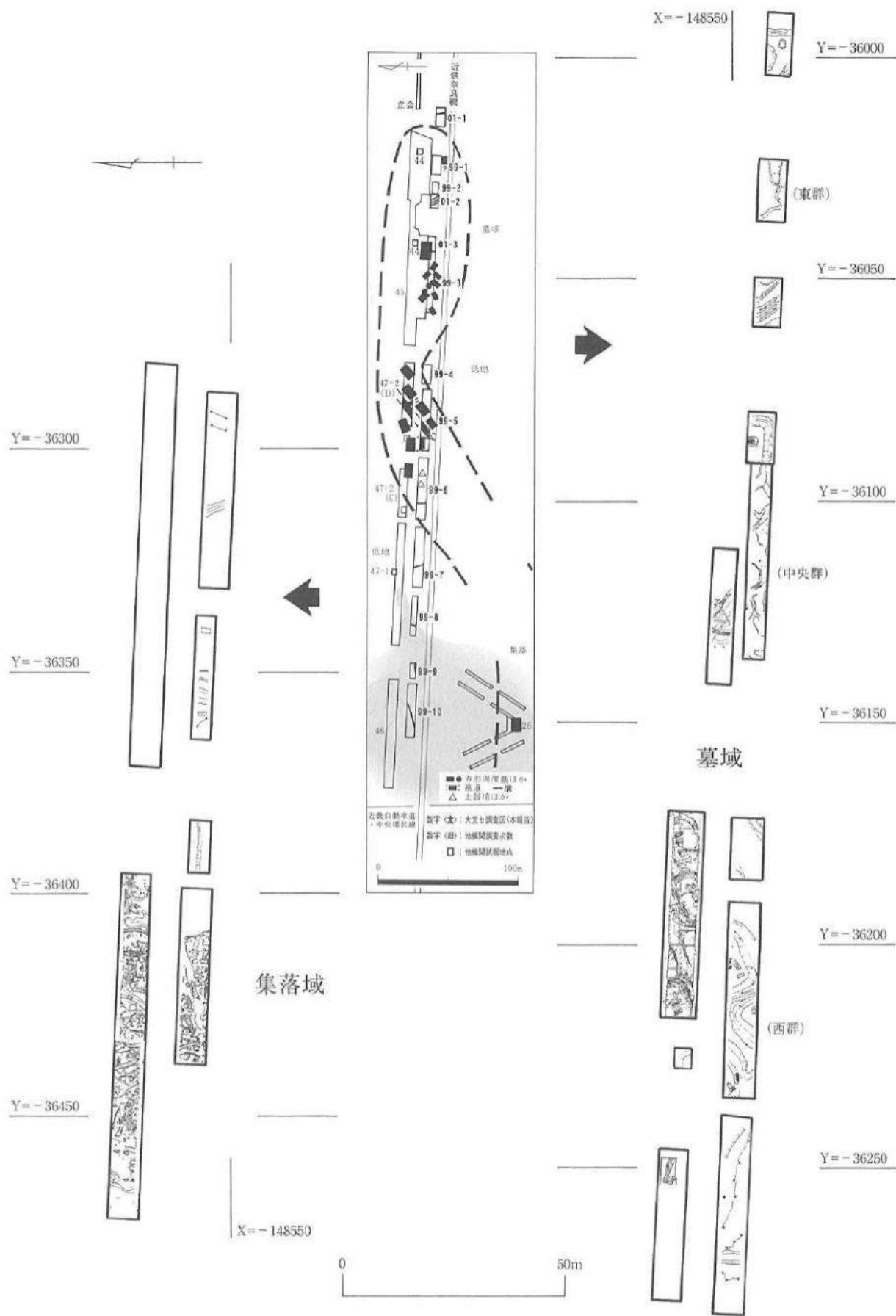


図400 瓜生堂遺跡北東部における弥生中期後半遺構配置図

うであるが、大きく時期をたがえる状況とはいえない。したがって、付近一帯で検出できた集落域と墓域のまとまりは、比較的単純なかたちでの対応関係と把握でき、同一集団の形成、継続展開によるものと考えてよい。

なお、99-8区で単独で出土した石庖丁（図402-下：図170-4364）は中期後半の層順より下層で検出している。層位的には中期でも中葉以前にさかのぼる可能性をみせるが、該期の土器出土が一切なく確定できない。中期中葉以前の様相に関しては、市調査区で検出された遺構との関係で後に再述する。

以下では、弥生中期後半の各地域の様相を簡単にまとめておこう。

（2）集落域

集落域の内容は、99-10区と市46次区で顕著に確認できた。上述したように、中期後半（Ⅳ-1・2様式前後）というほぼ限定できる時期幅内で継続的に形成された集落である。ただし、当センター・市調査区ともに3遺構面として把握できたので、決して短期間での居住域ではない。

遺構には井戸、土坑、溝、柱穴等の各種があり、それらを複数面で枢密状態で検出しているのも、高い“集住”度の痕跡を示すといえる（本書図81・82参照）。建物柱穴に比定できる遺構が数多くあるにもかかわらず、竪穴住居跡の存在を明示する周壁溝等が確認できないので、建物のほとんどは掘立柱建物だった蓋然性が高い。この様相は、これまでの本遺跡発見の建物傾向とも合致する。今回の99-10区では、柱穴配置からの建物復原を積極的には実施しなかったが、市46次区では何棟かの掘立柱建物復原案が提示されている（図401）。この案では大形・中形建物はまったく存在せず、すべて床面積が約2～5㎡におさまる小形建物となっている。このような小形掘立柱建物を主体として構成される雑舎群の様相が、本地点付近での集落景観だったのであろう。

ここでの集落域は、99-10区の南側でかつて実施された調査会26次区（4Ⅰ地区）でも密度はやや稀薄ではあるが類似した遺構内容をみせるので、少なくとも東西・南北とも約100mの分布域を備えていたと想定できる。その範囲を細かくみると、今回の調査地付近では、東限はこの度の調査等で確定でき、西限は近畿自動車道部の調査範囲までは広がっていないので、東西幅はほぼ100m程度であったといえる。また、当時の河内湖が北接しているのも、北への展開も広いものではない。南限を確定する根拠はないが、上記した26次区において遺構分布がやや稀薄となる傾向が実態を反映しているならば、その地点より大きくは南進しない可能性が考えられる。よって、この居住域は、100m四方ないしそれを少しうわまわる程度の分布規模におさまることになるだろうか。

（3）墓域

墓域は、当該地の東半部で確認した。これらは現状で、20基程度の方形周溝墓群（円形周溝墓を含む）と、それらとは別地点における甕棺墓2基から構成される。当時の地形環境からして、この墓域も北側へは大きく拡大する可能性が低い。しかし、未調査の南側へは広がるのは確実である。また、この墓域が、今回の墓域西端（99-6区）より西南西約160mの調査会26次区で確認された方形周溝墓と同一墓域を形成するかは、今後の調査進展に待たねばならない。このように、墓域全体としての範囲や内容は未知数である。

さて、東西带状に検出した今回の墓域範囲のなかでは、先述のように、99-4区と01-2区付近が微低地で墓関係遺構がみられなかった。この調査結果から、本節では便宜的な仮区分として、その部分を境に西群、中央群、東群に3区分し、現状での各小群の概要を述べると次のようになる。

〔西群〕99-5区、市47-2次（C・D）区、府試掘第2トレンチにおいて7基の方形周溝墓群（本

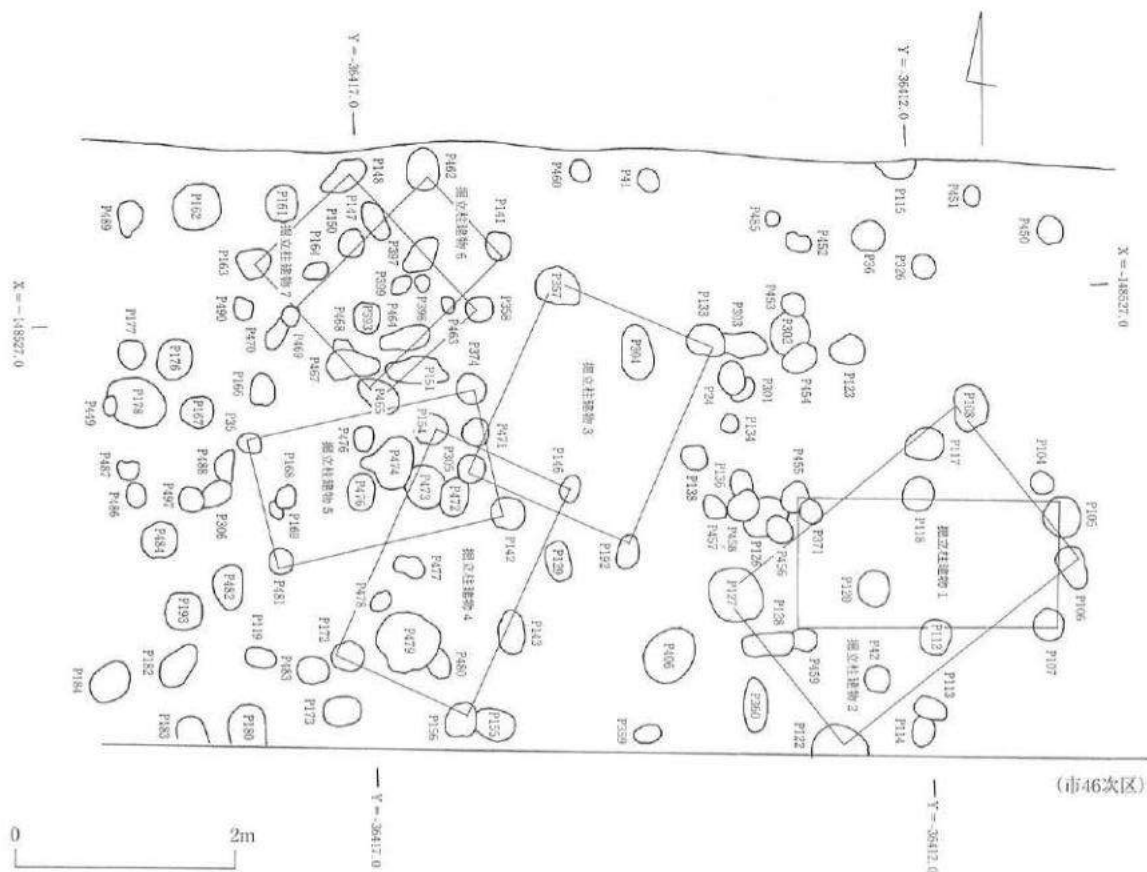


図401 瓜生堂遺跡北東部における掘立柱建物復原案（中期後半）

書図77・93ほか参照)、そしてその西端の99-6区に2基の甕棺墓(本書図78ほか参照)がある。

7基の方形周溝墓は、判明するかぎりでも、墳丘主軸は北東-南西ないしそれに近い方位をとる。各周溝墓は、隣接する墓相互でも基本的には周溝を共有することなく、周溝部を含めたかたちで独立した1基として構築されている。各墓間に距離がある場合は、当時の地表面の掘り残し部が相互間に存在することになる。その部分は、市47-2次(D)区では「墓道」として評価され、今回の99-5区では「堤状遺構」(S05260)と呼称した箇所にあたるが、両者は本来一続きのものである。これが結果的に墓道として機能していた可能性はあるが、造墓当初は各周溝墓間の間隙帯であった。

方形周溝墓の全容が判明する例はないが、各墓ともに、墳丘上や墳丘斜面部に木棺墓と一部土壙墓が設けられ、複数主体部となる(現状での最大は4基)。なかには、他に甕棺や壺棺を若干基ともなう例もある。木棺・土壙墓の主軸は、墳丘方位にのったものとそれに直交するおおむね二者にわかれる。型式が判明する木棺では、多くは福永伸哉分類(福永1985)のⅡ型にあたり、他にⅠ型の可能性がある例(99-5区S05200のS05215、本書図102)もみられる。主体部にとまなう明確な副葬品はないが、市47-2次(D)区の1号周溝墓1号主体部の墓壙掘方埋土中から、完形の打製尖頭器が1点検出されている。供献土器は一部をのぞき比較的豊富にとまなっており、その多数に穿孔が施されている。ただし、西群のうち最も東側で検出された市47-2次(D)区の4号周溝墓では、甕棺にはやや特殊穿孔のなされた個体はみられるが、供献土器に穿孔例がない点は注意される(本章第3節および同図416参照)。

99-6区の2基の甕棺墓は、現状で方形周溝墓群とは独立した状態で検出できた。この地区は弥生後期集石遺構が存在し一定の改変行為がみられ、後期以降でも流路の影響がおよんだ範囲でもあるので、

本来は周溝墓に付随した土器棺であった可能性も否定できない。が、現地調査での判断はできなかった。

西群にともなった供献土器や土器棺に用いられた個体を通覧すると、市47-2次(D)区4号周溝墓のものと99-5区の南東部分の土器の一部が中期中葉までさかのぼる個体を含みⅢ~Ⅳ-1様式前後で、他はおおむね中期後半Ⅳ-1~3(主体はⅣ-2前後か)様式に属すると考えられる(本書図128参照)。したがって、この墓域では東側から造墓活動が開始された可能性が高い。また、本群で最も東端に位置し構築の早かった市47-2次(D)区4号周溝墓に穿孔供献土器が存在しなかった点に関しては、古い段階の特徴が反映された可能性も考慮しておくべきかもしれない。

〔中央群〕99-3区、市45次区において、8基の方形周溝墓群と2基の円形周溝墓(本書図75・76・91ほか参照)がある。ただし、市45次区では中期遺構面まで調査された範囲が狭いので、実態基数はさらに増える可能性が高い。

この群の周溝墓は墳丘端とその周溝部だけを検出したものが多く不明確な例が大半だが、墳丘主軸を北西-南東ないしほぼ東-西の方位をとる例が存在し、西群の主軸とは異なる。また、やや規模が小さい周溝墓が混在する状況も差異となる。各周溝墓は隣接墓とは周溝を共有せずに構築されている傾向は西群と共通するが、周溝間に切り合い関係を備える例はありそうである。ここでも全容が判明する墓がなく、主体部数が確実にわかる例はない。99-3区と市45次区にわたって確認したS03200墓では、墳丘過半を調査したかぎり、墳丘ほぼ中央で墳丘主軸に平行する木棺墓1基が存在し、01-3区・99-3区で確認したS23200(S03210)墓では、墳丘のほぼ南半分を調査したかぎり、墳丘中央のやや東寄り、墳丘主軸に直交する木棺墓1基を検出した。両墓ともそれ以外に主体部が存在する可能性があるものの、西群における主体部数より少なくなる公算は高い。中央群での木棺検出はこの2例だけだが、ともに遺存状況が悪く型式は判断できない。主体部にともなう副葬品もない。なお、西群でみられた土器棺墓は、中央群では確認できなかった。供献土器はいくつかの周溝墓にともなっており、そのほとんどに穿孔や口縁部打ち欠きが施されている。ただし、周溝を含め墓のほぼ半分を調査したS23200墓では、甕口縁小片1点等を検出ただけで明確な供献土器の存在がなかった点は、西群の様相とはやや異なる。

ここで2基確認できた円形周溝墓(99-3区、市45次区)は、この墓制の西方(讃岐・播磨・備前地域ほか)からの拡散現象(岸本1999、岸本2001)との関係において、比較的早い段階の近畿中央部例として注意されてよい。しかし残念ながら、ともに周溝の部分的な確認にとどまったため、墓制としての内容把握にはいたらなかった。

中央群にともなった供献土器を通覧すると、S03200墓のものが中期中葉Ⅲ(-2)様式にさかのぼり、他のものはおおむね中期後半Ⅳ-1~3様式に属すると考えられる。この中央群は、現状では北西側から造墓活動がなされた可能性があるかもしれない。また、存続時期の点では西群と相等しい状況といえる。

〔東群〕最も東側の99-1区では、穿孔が施された完形土器の出土があったので、それらは周溝墓に供献された個体である蓋然性が高い(本書図84ほか参照)。周溝墓が存在していたとなると1基ないし2基の可能性があるが、古墳時代の流路の浸食等があり、墓としての十分な構造把握にはいたらなかった。土器の時期はⅣ-2・3様式に属する。

以上のように、墓域を3小群に仮区分して概要を述べた。このなかで墓域として確実な西群と中央群は、同じ方形周溝墓群として基本的な共通性を保有するという前提(普遍性)をそなえつつ、現状での相違点としては、墳丘規模の大小、墳丘主軸、主体部数の多寡、供献土器の普遍性の有無とその個体数、

土器棺墓の有無、円形周溝墓の有無等々という、あえていうならば特殊性（個性）をあげることができる。この問題等に関しては、次節であらためて検討する予定である。

（４）低地部域

上記してきた集落域と墓域には含まれた、99-10区東端部付近と市47-1次区の以東、99-6区西半部と市47-2次（C）区大半の以西の範囲が、中期後半段階における低地部域にあたる。この範囲では、センター諸調査区で溝（排水用か）等を確認しているが、市諸調査区では明確な遺構は検出されていない。この部分の堆積層の所見でも、大部分が当時は低湿地状を呈しており、部分的に流路が存在したような環境と推定される。明確で積極的な人為活動が中期後半にはおよんでいなかった箇所である。付近での集落域の存在や溝等の遺構分布の様相から、ここに水田域の存在をも予想し留意して調査にあたったが、その痕跡は把握できなかった。遺物の出土も、集落域に接する99-10区東端の低湿地部S10100では、集落側からの廃棄や流れ込みの土器等は比較的多く出土したものの、他調査区では極端に少ない有様であった。

また、この時期における同様な状況は、墓域のさらに東側にあたる01-1区でも見受けられる。センター02年度調査区の所見からも、墓域より東側の部分では同様な低湿地的な土地環境を示し、地形的な境界を形成している。このことから、上記で墓域の東群とした箇所（99-1区）が、瓜生堂遺跡としての東限となっていたと判断できる。

なお、集落域と墓域の中間範囲において、中期後半の層順より下層では、先に若干ふれたように少し状況が異なる（図402）。具体的には、中期後半遺構面とその下位に存在する弥生前期遺構面の間の層順

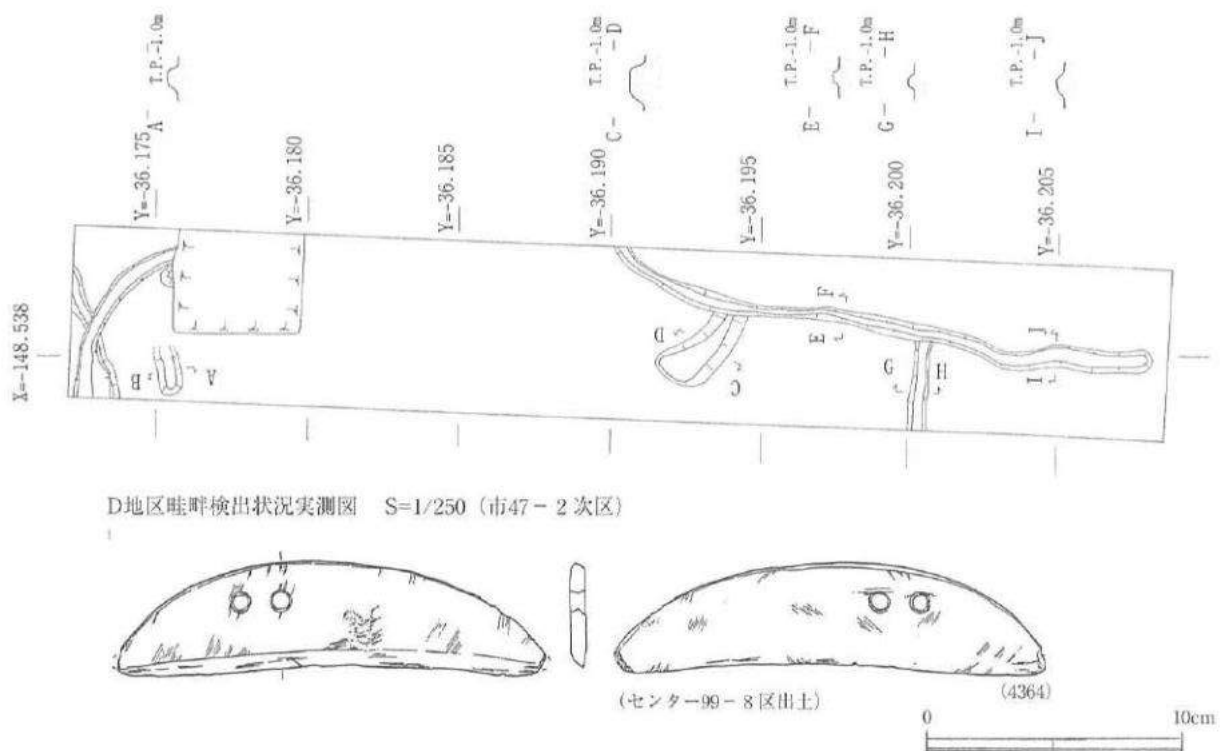


図402 瓜生堂遺跡北東部における弥生中期前半（推定）の水田畦畔と石庖丁

において、99-8区では完形石庖丁が単独で出土し、プラント・オパール分析等でも稲作証左を得ている（第8章第1節参照）。また、市47-2次（D）区では、中期後半の方形周溝墓群が存在した箇所の下層において、水田畦畔と判断された遺構が実際に確認されている。両調査区ともに、それらに共伴した土器が皆無なので詳細時期の特定はできなかったが、層順からの推定として弥生中期前葉～中葉の時間幅におさまる可能性が推定できる。しかし、付近一帯ではこの時期の遺構や土器等の遺物類がまったく検出できていないので、これらの水田を経営した集落の存在は近接では把握できない。今後の周辺部での調査において留意しておくべき事項といえる。

（5）遺物の様相

上の遺構内容をふまえ、瓜生堂遺跡北東部での弥生中期後半の遺物様相を概観しておこう。

集落域では、99-10区と市46次区において豊富に出土している。個別にはあらためて解説しないが、それらは総体として弥生農耕集落における一般的な装備内容といえる。本遺跡ではこれまで大阪湾型銅戈や青銅鋳銅用鋳型など特殊品が確認されているが、金属器製作に関連するような遺物類は当該地ではまったくない。また、鹿・魚・建物ほかの絵画土器の出土もこれまで周知されてきたが、ここでは同様

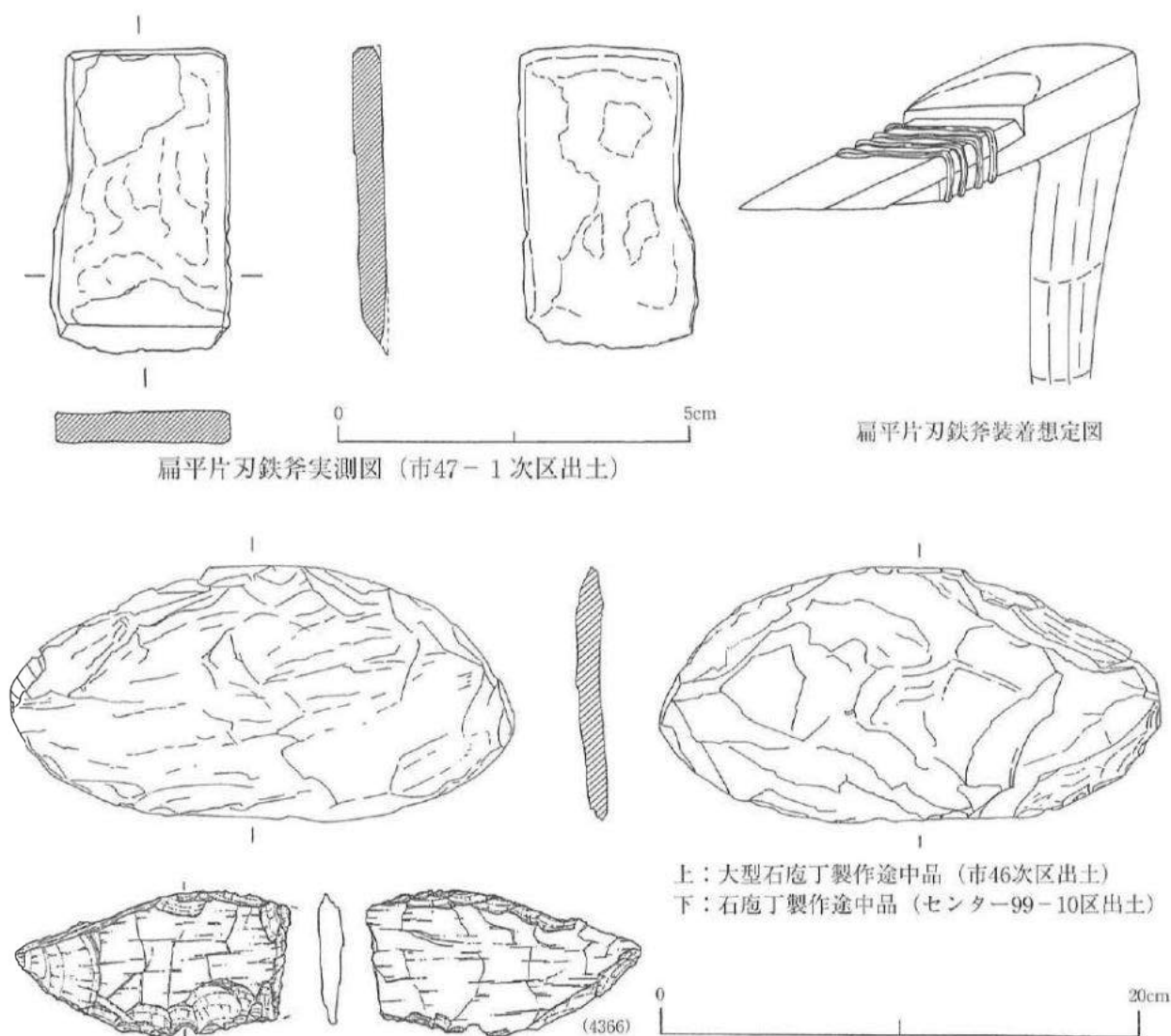
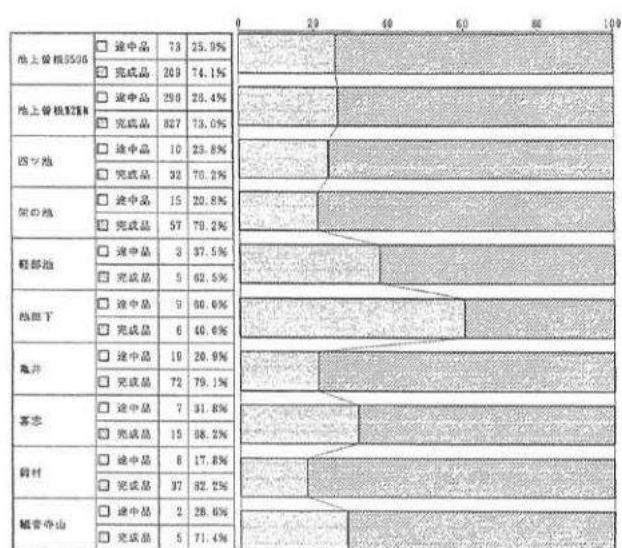


図403 瓜生堂遺跡北東部出土の扁平片刃鉄斧と石庖丁製作途中品（中期後半）

石庖丁製作工程個体集計表

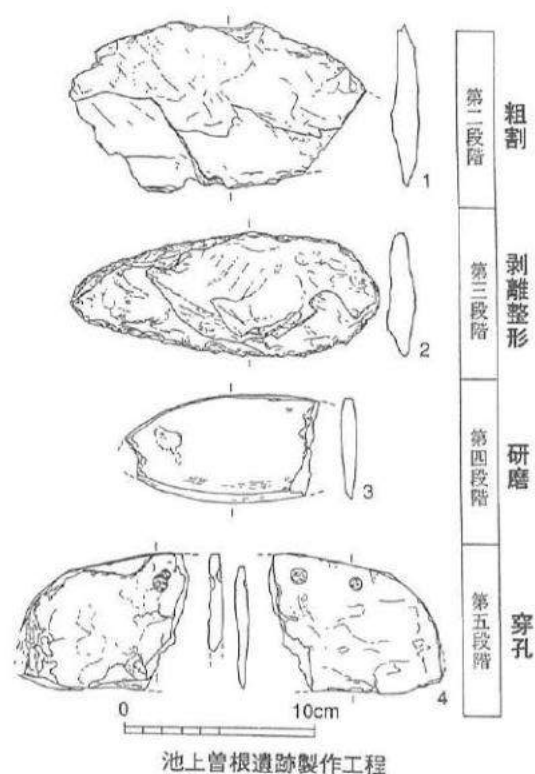
遺跡名	地域	時期	素材	製作途中品	完成品	小片	総数(素材除)	製作途中品率	総数製作途中品率	粗割	剥離	研磨	穿孔
池上曾根95～96	和泉	中期主体	22	73	209	128	410	25.9	17.8	7	32	22	12
池上曾根第2版和	和泉	中期主体	あり	296	827	468	1591	26.4	18.6	→	121	140	33
四ツ池遺跡	和泉	中期主体	1	10	32	12	54	23.8	18.5	0	3	6	1
柴の池遺跡	和泉	中期	0	15	57	15	87	20.8	17.2	0	7	8	0
池田下遺跡	和泉	中期中頃～後半	0	9	6	4	19	60.0	47.4	5	1	1	2
鞍部池遺跡	和泉	中期後半	0	3	5	0	8	37.5	37.5	0	1	1	1
亀井遺跡	河内	中期～後期主体	2	19	72	4	95	20.9	20.0	2	8	7	2
喜志遺跡	河内	中期主体	0	7	15	9	31	31.8	22.6	0	5	1	1
岡村遺跡	紀伊	中期～後期主体	2	8	37	5	50	17.8	16.0	0	1	3	4
観音寺山遺跡	和泉	後期	0	2	5	3	10	28.6	20.0	0	1	1	0
立岩遺跡群	北部九州	中期前半	0	858	64	566	1488	93.1	57.7	10	438	158	252

(数値は個体数、製作途中品率は%、→は次項目に含めることを指す。
集計に関しては本文に対応。)

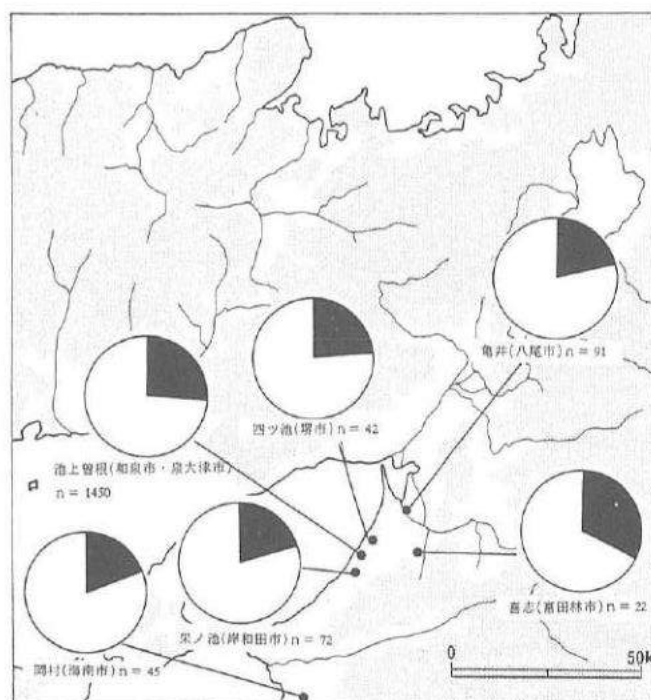


各集落の製作途中品率

(資料・数値は表に対応)



池上曾根遺跡製作工程



畿内地域南部における結晶片岩製石庖丁の完成品と製作途中品の比率
(仲原2000記載データをもとに作成)
白抜きは完成品

図404 近畿弥生中期集落ほかにおける石庖丁製作途中品率

に検出されていない。ただし、鉄器では、低地部域の市47-1次区の落ち込み遺構から、中国戦国期の鋳造鉄斧を再加工した扁平片刃鉄斧（図403-上）が出土している。近畿出土の中期後半段階における稀少例だけに注目できる。

製品（完成品）としての品目以外では、サヌカイト製の各種打製石器および結晶片岩製の磨製石庖丁の製作関係の遺物が出土している。サヌカイトを用いた石器製作に関しては、弥生前期とは異なった、比較的潤沢な原材使用による石器製作が想定できる（詳細は本章第8節参照）。石庖丁の製作途中品（図403-下）は、量は決して多くないものの2点確認され、確実に当該地でも石庖丁製作をおこなっていた証左となる。ちなみに、ここでの石庖丁の製作途中品率（製作途中品÷＜同＋有孔完成品＞）は約15%となり、近畿の他の弥生集落における比率（秋山1999a、同2003、仲原2000、図404）との比較において決して極端に低い数値とはなっていない。本遺跡では、これまで数多くなされた発掘において石庖丁の製作途中品がほとんど出土せず、「完成品率は100%」近いとまで指摘されてきた内容（田代1986、中西1989）と、ここでの状況は様相を異にすることになる。この点は、従前資料の再検討を含め今後の課題として残るものの、要するに、今回の集落域では、完成した道具類にしても石器の製作状況についても、他の一般的な弥生中期農耕集落の様相を大きく逸脱しない傾向をみせる。また、センター調査区での出土はなかったが、市46次区では鋤の製作途中品と報告された木製品がみられ、木器製作もおこなわれていた可能性がある点を付記しておきたい（なお、本遺跡の木器生産状況に関しては本章第9節参照）。

墓域では、方形周溝墓群に共伴した供献土器等以外に、顕著な内容は把握できない。土器以外の出土品は皆無に近く、主体部にともなう明確な副葬品もない。ただ、先に紹介した墓壙掘方内から出土したサヌカイト製打製尖頭器については、弥生の埋葬主体から時折発見される類例との関連で注意できよう。一方、方形周溝墓にともなう供献土器の多さや器種内容、さらにそのなかに穿孔品が多く存在する特色は、周辺地域の周溝墓群におおむね一般的にみられる現象である。ただ、上述したように、各墓にともなう供献土器の有無や多寡、さらには穿孔品のあり方等には、あえて取り上げるなら個性的特色がみられる可能性もある（詳細は本章第3節参照）。

さて、集落・墓域ともにみられる土器に関し注目できる点として、非在地品の生駒山西麓産土器が比較的多く占めている事実がある。この現象については、従来からも指摘されているところだが、今回のセンター99・01年度調査区での集計（中期後半）において、集落域では約30%、墓域では約74%もの占有率となっている。全体的に生駒山西麓産の占める割合が高い点が再確認できるが、墓域の供献土器により一層の生駒山西麓産が用いられている事実を具体的に示すことができた（詳細は本章第4節参照）。

2. 弥生中期大形集落としての瓜生堂遺跡とその内部構造理解

（1）1990年代後半までの到達点

以上の瓜生堂遺跡北東部の様相を基礎にして、本遺跡全体のなかでの位置づけを試みたい。

瓜生堂遺跡は、これまでの行政処理上の範疇として、南北約0.9km、東西約1.2kmの広範囲におよぶ複合遺跡として理解されてきた。だが、頭書でも若干述べたように、弥生中期段階の有機的関係が把握できる実体的な分布域としては、南接する巨摩遺跡や若江北遺跡の一部を包括し、図405に示したような南北約1.5km、東西約1.6kmの広大な面積を占有する範囲として理解される。この分布域のなかで、広範囲に居住域が存在し、しかもそれに重複して、小阪ポンプ場地点の方形周溝墓群（図406、次節写真10）を代表格として100基近くの方角周溝墓群からなる大墓域が形成されているわけである。この広大な占有面積や

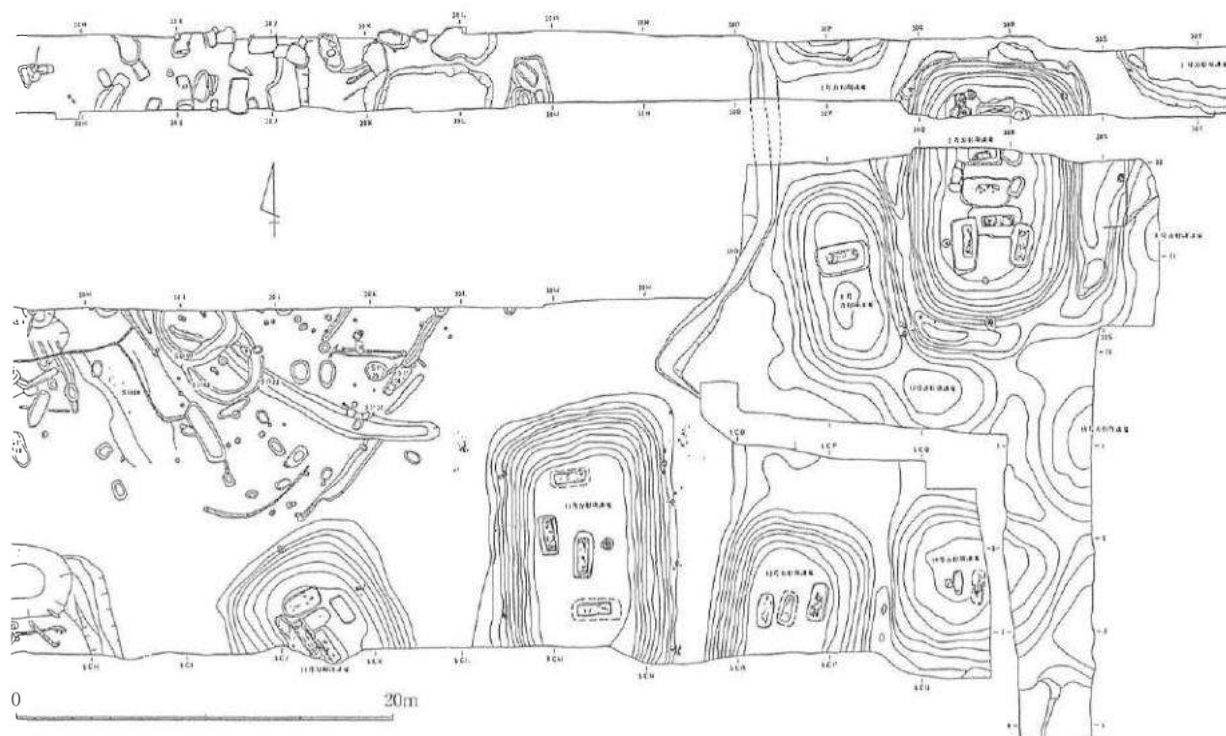


図406 瓜生堂遺跡における弥生中期墓域の様相

遺跡内容から、大形で拠点的な弥生中期集落の典型例として本遺跡は扱われてきた。

近畿各地の拠点的な弥生中期集落は、集住の一形態としてこのような広大な面積を占める実態がみられる。その場合多くは、奈良県・大和地域の唐古・鍵遺跡（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館ほか1996、ほか）や大阪府南部・和泉地域の池上曾根遺跡（池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会1996、秋山1999b、ほか）のように、集落本体の周囲に環濠をめぐらし、その広大さを実質的にも視覚的にも遺構として明示している。瓜生堂遺跡では居住域等を取り囲む環濠そのものは確認できないが、同様に弥生中期に最大規模に達する巨大集落として把握してよいものである。この広大な遺跡のなかで、これまでは集落（居住）域と墓（方形周溝墓群ほか）域が入り乱れ錯綜した状態で検出され続けてきた。その現象ゆえにより一層、巨大集落の大規模性と複雑性、そしてその拠点集落ならではの各種特性が暗黙のうちに強調されてきたことになる。要するに、中期のある段階で居住域に活用されていた土地が、その直後には墓域として展開し、重層的な空間利用による累積結果が、考古データに依拠した遺跡理解をさらに容易ならざるものにしてきた。

このような状況のなかで、瓜生堂遺跡における居住域や墓域の分布相違を意識し遺跡分析を試みる貴重で先駆的な研究（中西1989、同1992）もみられたが、その方向性はいわば上述したような雑現象のなかに埋没した有様を呈した。むしろ大局的な動向としては、本遺跡をはじめとする弥生中期大形集落の巨大性・複雑性を総体として把握し評価しようとする研究趨勢が優勢であったといえる。しかし、この研究情勢のなか、一種混迷をきわめる瓜生堂遺跡の総体的な考古現象面を、近年の松宮1997では時間軸を基準に一定の整理を試みた。そしてそれは、以降の本遺跡における内容評価での重要な指針を提供している（図407）。

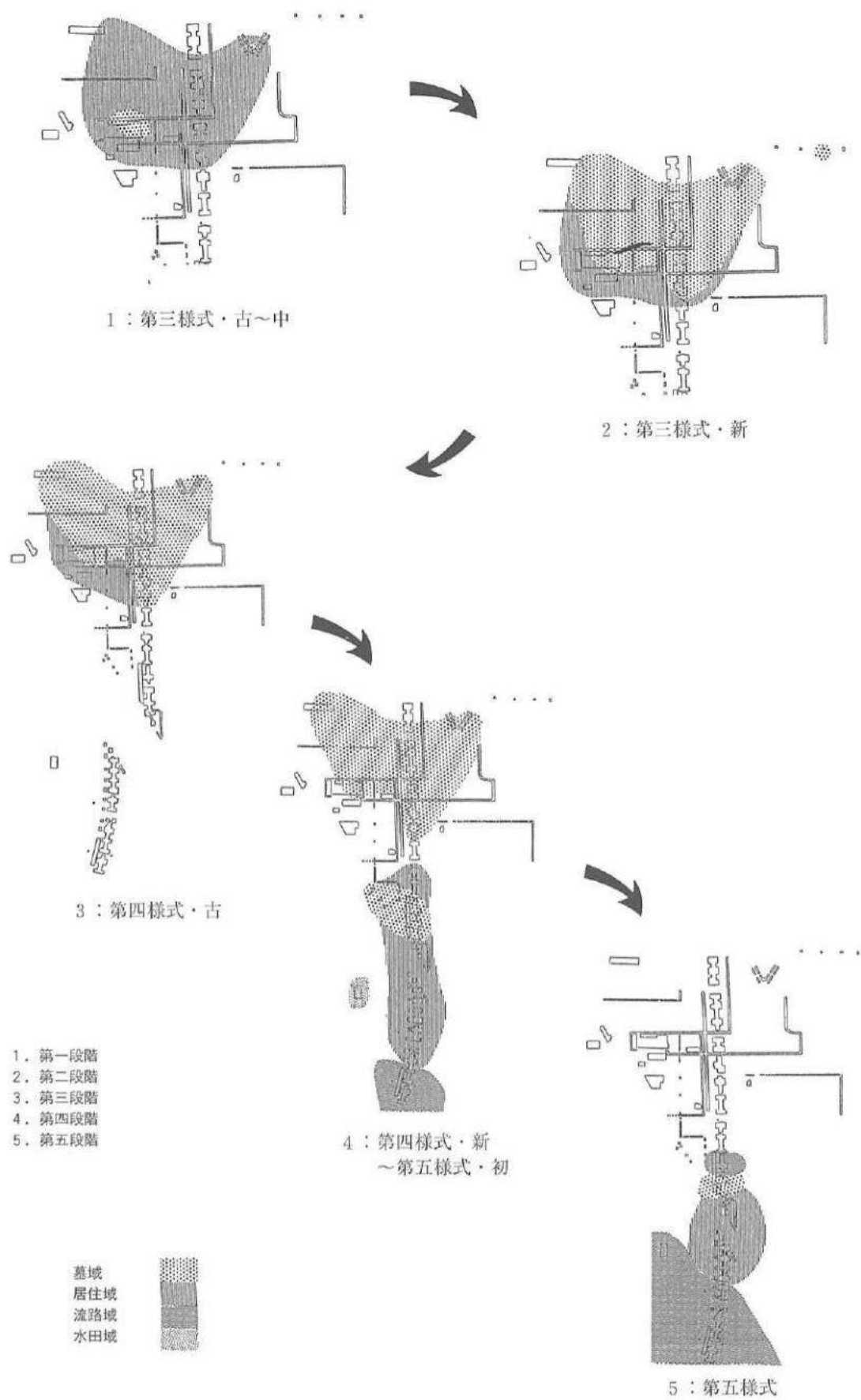
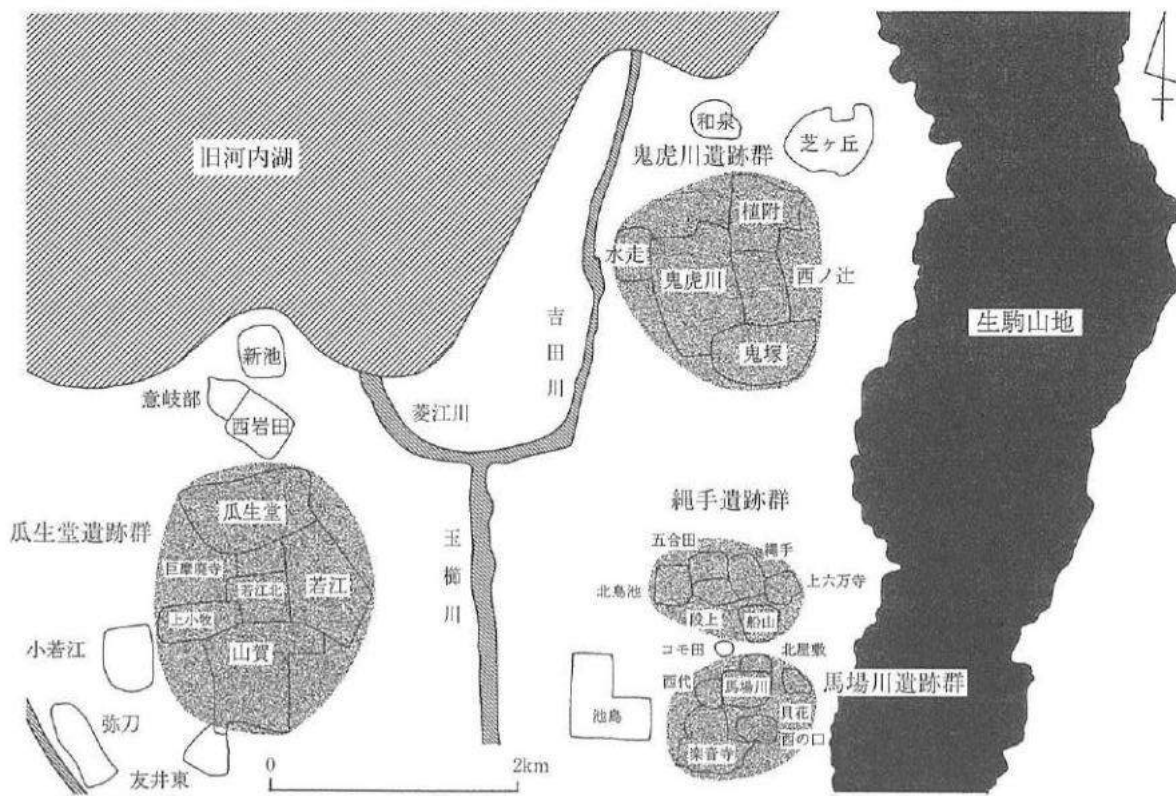


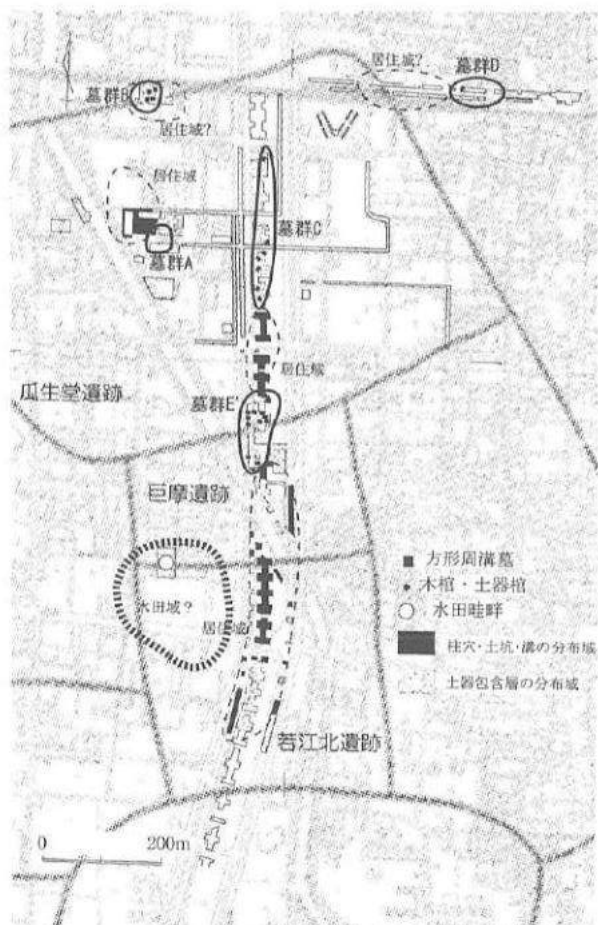
図407 瓜生堂遺跡周辺域における弥生中期・後期集落変遷様式図



河内湖東南辺弥生時代遺跡群模式図



河内湖南岸遺跡群遺構配置 (中期中葉後半)



河内湖南岸遺跡群遺構配置 (中期後葉)

図408 瓜生堂遺跡をめぐる近年の弥生集落研究動向

（２）今回の現象整理以降

この1990年代後半までにおける到達点をふまえ、本遺跡北東部における一連の発掘調査が開始されたことになる。そしてその結果として、この一帯での弥生中期の遺跡展開は、上記したように、土地利用において同一箇所での重複関係がまったくといってよいほどないことを明らかにできた。要するに、中期後半段階における遺跡内部の一実態を、比較的プレーンなかたちで把握できたといえる。具体的には、東西・南北とも100m強程度の集落（居住）域と、東西約250（ないし400）mで南北約25（ないし100）m以上の墓域が、その間に非利用地の低地部をはさみ並列する状況を、コンパクトな様相で理解できた。しかも、それらは同一集団によって同時形成されたまとまりと評価できる。このうち、墓域では2～3小グループに区分できる可能性は上で示唆したとおりであるが、これは空間的な占有様相から、一まとまりのなかの小区分という程度のあり方であろう。ともあれ、今回の遺跡北東部の弥生中期集落・墓域の様相は、時間的一断面における、大集落内部での一構成単位の具体的構造を提示したものと理解してよい。

したがって、1990年代後半までの時間軸による成果に、今回の遺跡北東部の現象整理を加味するならば、これまで複雑性のなかに霧散し容易には把握できそうにもなかった、中期大形集落の構成実態を解きほぐす方向性を与えるものといえる。すなわち、大集落におけるある段階の集落構造は、今回の北東部域におけるような構成単位が集合したかたちであった、という可能性を提示できるものである。そして、ここの構成単位内での遺構・遺物の種類や内容から把握できた点は、一般的な農耕集落としての特質を備えたものであったという事実も、今後、大集落における構造的・経済的な理解をめぐる一定の考究材料になろう。

このような本遺跡の現象整理は重要な観点となる。

実際に、近畿弥生集落研究を従来から積極的に進める若林邦彦によって、今回の瓜生堂遺跡北東部域での途中成果をも盛り込んだかたちで、河内湖南岸遺跡群（瓜生堂遺跡周辺部）、平野川・長瀬川遺跡群（亀井遺跡・久宝寺遺跡周辺部）、河内湖東岸部遺跡群（鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡周辺部）という3領域における集落構造の分析が、個別実態にそくして試みられ重要な成果を得ている（若林2001、図408-下）。すなわち、弥生中期に継続的な遺跡形成がみられる大規模集落や拠点集落といわれる領域では、直径100～200m程度の平面規模の居住域に方形周溝墓群が付随した構造が複数近接存在したものであり、これまで同時期の小規模集落と称されてきた遺跡は、そのセット関係が集合せず散在して分布する姿と把握する。

この理解は、先の瓜生堂遺跡における中西1989ほかの視座の延長線上に位置する視点でもあるが、これまで主に“総体”として理解されてきた弥生大形集落の内部実態を解明するうえで、意義ある研究として評価できる。このように、今回の調査で比較的明確に把握できた構成単位理解に依拠し弥生中期の大規模集落を解析するならば、ひとり瓜生堂遺跡のみに適応できる視座ではなく、近畿弥生集落の構造的評価においてすこぶる有効性を発揮する点を遺憾なく証明している。この意味において、今回の発掘成果を含め遺跡北東部での一連の調査で得られた結果やその検討の内実には、はかり知れないものがあるといえる。

3. 近年の弥生集落・「都市」論研究との関係一結びにかえて一

周知のとおり、池上曾根遺跡の1994年度調査における大形建物・井戸の発見を実質的な契機として、弥生時代における「都市」論研究が盛んになった（後掲の秋山、乾、大阪府立弥生文化博物館、摂河泉地域史研究会ほか、田中・金関、寺沢、広瀬、ほか文献等参照）。そして、その池上曾根・大形特殊遺構の発見からすでに10年近くの年月が流れようとしている。この一連の論議自体は、これまで実態として不明なことが多かった大形集落内部に対する検討を大きく深化させたという点からみて、弥生研究史上における重要な成果である。一方、池上曾根遺跡の発掘担当として筆者はこの間一貫して、ややもすれば観念的議論において散見される傾向のあった、考古実態からの乖離を憂慮してきた。と同時に、池上曾根遺跡での遺物類を中心とする考古資料分析に依拠し、経済的側面を重視して、大形弥生集落を「都市」として呼称する議論に抗してきた（秋山1999a、同2001、同2002a・bほか）。現在の研究情勢のなかでも、弥生「都市」論の最終的な決着はついていないようではあるが、筆者のとった方向性は今も変更する必要はないと考える。

この近年の弥生集落をめぐる研究情勢と本報告書で提示した現象整理との関係性について、最後に若干ふれておこう。弥生「都市」研究においては、各論者の力点のおき具合は一樣ではないが、巨大・大形な拠点集落自体の評価にあたって、いわば一個の中核を備えた統一体とする理解が趨勢を占めているように見受けられる。その統一体の要に位置するのが集落を統括する首長やその権力であり、それらを重視する論調が主体となっている。しかし、近畿有数の大形集落である瓜生堂遺跡では、決して、確固たる一個の統一体として把握できるようなものではなく、集落・墓域（そして生産域）の組み合わせからなる構成単位の複数集合体としてのあり方が構造実態であった。今回の一連の調査で得られたこの理解は、筆者が従前より弥生「都市」論に対し経済的側面から警鐘を発してきた内容を、集落構造の観点からも補強するものと思われる。

〔引用・参考文献〕

- 秋山浩三 1999a 「近畿における弥生「神殿」「都市」論の行方」『ヒストリア』163 大阪歴史学会
1999b 「池上曾根遺跡中核部における大形建物・井戸の変遷」『みずほ』28・31 大和弥生文化の会
2001 「池上曾根遺跡は“弥生都市”か否か」「弥生都市は語る－環濠からのメッセージ－記念シンポジウム・記念講演会資料集」弥生都市は語る展実行委員会ほか
2002a 「大阪府池上曾根遺跡の経済的様相」『日本考古学協会2002年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
2002b 「大阪府池上曾根遺跡の交易・分業関連資料」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』日本考古学協会2002年年度橿原大会実行委員会
2003 「弥生時代・畿内石庖丁の生産と流通」「道具の生産流通と地域関係の形成」古代学協会中国四国支部
2004 『史跡池上曾根99』（財）大阪府文化財センター（編）
池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会 1996 「弥生の環濠都市と巨大神殿」
乾 哲也 1996 「弥生中期における池上曾根遺跡の集落構造」『ヒストリア』152 大阪歴史学会
瓜生堂遺跡調査会 1972 『瓜生堂遺跡 資料編』
1973 『瓜生堂遺跡Ⅱ』
1981 『瓜生堂遺跡Ⅲ』
大阪の弥生遺跡検討会 1997 『大阪の弥生遺跡Ⅰ』
大阪府教育委員会 1967 『東大阪市瓜生堂遺跡の調査』
（財）大阪文化財センターほか 1980 『瓜生堂』
1981 『巨摩・瓜生堂』
1984 『山賀（その3）』
1985 『美園』
1991 『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』
（財）大阪府文化財調査研究センター 1992 『河内平野遺跡群の動態Ⅴ』

- 1993 「河内平野遺跡群の動態Ⅵ」
 1996 a 「河内平野遺跡群の動態Ⅲ」
 1996 b 「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書－第5次－」
 大阪府立花園高校地歴部 1970 「瓜生堂遺跡」『河内古代遺跡の研究』
 大阪府立弥生文化博物館 2001 『弥生都市は語る』
 大野 薫 1992 「瓜生堂遺跡北東辺部の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第25回）資料』
 梶山彦太郎・市原 実 1986 『大阪平野のおいたち』 青木書店
 岸本一宏 2001 「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会
 岸本道昭 1999 「播磨弥生社会はどう変わったか」『みずほ』30 大和弥生文化の会
 佐原 真 1868 「近畿地方」『弥生土器集成 本篇2』 日本考古学協会
 摂河泉地域史研究会・乾 哲也編 1999 『よみがえる弥生の都市と神殿』 批評社
 田代克己 1986 「石器・木器をつくるむら、つくらないむら」『弥生文化の研究 7』 雄山閣出版
 田中 琢・金関 恕編 1998 『古代史の論点3 都市と工業と流通』 小学館
 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 『瓜生堂遺跡』
 都出比呂志 1989 『農耕社会の成立過程』 岩波書店
 都出比呂志編 1998 『古代国家はこうして生まれた』 角川書店
 寺沢 薫 1998 「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』 角川書店
 寺沢 薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社
 寺前直人 2001 「流通論／磨製石庖丁の交易」『シンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」予稿集』 一宮市博物館
 中西靖人 1989 「大阪府瓜生堂遺跡」『探訪 弥生の遺跡 畿内・東日本編』 有斐閣
 1992 「農耕文化の定着」『新版古代の日本 5 近畿Ⅰ』 角川書店
 仲原知之 2000 「和泉地域の石庖丁生産と流通－近畿における石庖丁生産・流通の再検討（Ⅱ）－」『洛北史学』2 洛北史学会
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館ほか 1996 「弥生の風景 唐古・鍵遺跡の発掘調査60年」
 東大阪市教育委員会 1980 「瓜生堂遺跡東限の試掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 1979年度』
 2000 a 「瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告書」
 2000 b 「瓜生堂遺跡第47－1次発掘調査中間報告書」
 2002 「瓜生堂遺跡第46、47－1・2次発掘調査報告書」
 (財)東大阪市文化財協会 1997 『瓜生堂遺跡試掘調査報告』
 1999 「瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告」
 広瀬和雄 1998 「弥生都市の成立」『考古学研究』45－3 考古学研究会
 1986 「弥生土器の編年と二、三の問題」『亀井（その2）』(財)大阪文化財センターほか
 広瀬和雄編 1998 『日本古代史 都市と神殿の誕生』 新人物往來社
 福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』32－1 考古学研究会
 福永信雄 2001 「東大阪市鬼虎川遺跡について」(大阪府立弥生文化博物館 弥生サイト講座1 資料)
 松宮昌樹 1997 「瓜生堂遺跡と周辺遺跡の動態」『大阪の弥生遺跡Ⅰ』 大阪の弥生遺跡検討会
 三好孝一 1987 「生駒西麓型土器についての一視点」『花園史学』8 花園大学史学会
 2001 「手工業生産と集落」『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編 学生社
 若林邦彦 1997 「中河内弥生中期土器にみる諸相－生駒西麓型土器のもつ意味－」『考古学研究』43－4 考古学研究会
 1999 「大阪平野における拠点集落の性格－河内平野遺跡群を中心として－」『みずほ』31 大和弥生文化の会
 2001 「弥生時代大規模集落の評価－大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に－」『日本考古学』12 日本考古学協会

〔図出典〕

図400：本書掲載各遺構面図および大野1992、東大阪市教育委員会2000 a、同2000 b、同2002、(財)東大阪市文化財協会1999から合成・加筆作成、図401：東大阪市教育委員会2002、図402：本書掲載図および東大阪市教育委員会2002から作成、図403：東大阪市教育委員会2000 a、同2002から作成、図404：秋山2003（もと仲原2000、寺前2001から作成）、図405：新規作成（元図、(財)大阪府文化財調査研究センター1996 b 参考）、図406：若林2001（もと瓜生堂遺跡調査会1981、ほか）、図407：松宮1997に加筆作成、図9：福永2001、若林2001から作成

〔謝辞・付記〕

本編の一部は、第10回（2003年6月26日）ほかの各回の瓜生堂（近鉄）勉強会の発表内容や討論内容に基礎をおいている。参加者の多くの方から有益なご教示をいただいた。末筆ながら深謝申しあげたい。